

八街市柳沢牧大木境野馬土手

— 主要地方道成東酒々井線道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 26年3月

千葉県教育委員会

や　ち　ま　た　し　や　な　ぎ　さ　わ　ま　き　お　お　き　さ　かい　の　ま　ビ　て

八街市柳沢牧大木境野馬土手

— 主要地方道成東酒々井線道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第2集として、主要地方道成東酒々井線道路改良事業に伴って実施した八街市柳沢牧大木境野馬土手の発掘調査報告書です。調査成果としては、柳沢牧の南東部にあたる境土手と3条の溝を検出することができました。周辺の調査事例と合わせ、境土手の構造がより具体的に判明し、近世牧の様相を知るうえで貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関に、心から感謝申し上げます。

平成26年3月

千葉県教育委員会

文化財課長 湯淺京子

凡　　例

1 本書は、主要地方道成東酒々井線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　柳沢牧大木境野馬土手 八街市八街字大畑ほ380-3ほか（遺跡コード230-006）

3 発掘調査及び報告書作成に至る整理作業は千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

平成25年度

　千葉県教育庁教育振興部文化財課

　文化財課長　湯浅京子

　発掘調査班長　蜂屋孝之

　担当者　上席文化財主事 黒沢 崇

　実施期間　平成25年10月1日～10月31日

5 本書の執筆・編集は黒沢 崇が行った。

6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、八街市教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、千葉県印旛土木事務所、三里塚御料牧場記念館はか多くの方々からご指導、ご協力を得た。

7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。

8 本書で使用した地形図は下記の通りである。

　第2図 国土地理院発行 1:25,000 地形図「八街」平成22年を縮小編集

　第3図 八街市発行 1/2,500 八街市地形図を拡大編集

　第6図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「八街村」「東金町」

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
第2節 遺跡の位置と柳沢牧.....	2
第2章 調査の成果.....	5
第3章 総括.....	8

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 千葉県内の近世牧位置図.....	2	第4図 調査区平面図 (S=1/200)	6
第2図 柳沢牧位置図 (S=1/50,000)	3	第5図 遺構平面図・断面図 (S=1/100)	7
第3図 周辺地形図と調査地点 (S=1/2,000)	4	第6図 迅速測図と調査地点 (S=1/20,000)	9

図版目次

図版1 調査前・調査状況

図版3 トレンチ1・トレンチ2

図版2 トレンチ1

図版4 トレンチ2・調査後状況

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

八街市は千葉県の県西部から北東部や南東部へ向かう交通路の要衝であり、特に、八街駅周辺は、国道409号、千葉八街横芝線、成東酒々井線等、国県道が集中しているため従来から駅利用交通と通過交通による慢性的な交通渋滞が発生している。そこで、県は駅利用交通と通過交通との分離をすすめ、交通混雑の解消・歩行者の安全等を図るために主要地方道成東酒々井線八街バイパスの整備計画をたてた。この整備計画にあたって平成9年12月に、千葉県印旛土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成10年10月に事業計画地内に野馬土手が所在する旨の回答を行った。そして、この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、平成25年度に、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。なお、本事業地内では5地点の野馬土手が所在する。そのうち2か所〔第2図⑪⑫〕については平成12年度に（財）印旛郡文化財センターによる発掘調査が実施され、既に報告書〔注⑪⑫〕が刊行されている。また、残る未調査地は今回調査区の西側にある2地点で、その内1地点については平成26年度に調査を予定している。

今回の発掘調査は調査対象750m²に対して平成25年10月1日に開始し、同10月11日に現場作業を終了し、引き続き10月31日まで整理作業を実施した。

2 調査の方法と経過

発掘調査 調査対象の遺跡は近世牧の野馬土手であり、工事範囲内に幅約5m、高さ約50cmの高まりとして遺存している状態であった。土手の東側にはやや窪地が見られたことから溝を作った野馬土手であることが想定された。近隣の調査成果からも複数の溝が検出される可能性が高いため、土手を中心とした幅30mと比較的広めの範囲を調査対象区とした。事業者による竹木伐採後、掘削作業前に地形測量を実施した。発掘調査は重機を使用したトレーナーによる確認調査である。確認トレーナーは土手に直行する方向に2本設定した。トレーナー内で検出された遺構は3条の溝で、覆土を取り除き完掘した。遺物は出土しなかった。調査終了後、トレーナー内を重機で埋め戻し、現場作業を終えた。なお、旧石器時代包蔵地ではないため、下層確認調査は実施しなかった。検出した遺構については高まりの部分を土手部、3条の溝を西からSD-001・SD-002・SD-003と呼称した。記録は平板測量により地形測量図・トレーナー・遺構平面図を作成し、遺構断面図についても手実測により行った。写真撮影は6×7モノクロ、35mmカラーリバーサルフィルムカメラとともにデジタルカメラ(Raw・JPEGデータ)により実施した。

整理作業 現場発掘作業期間と併行して、既存の柳沢牧野馬土手資料の収集・整理、調査図面・写真的記録整理を進めた。調査後、現場図面を鉛筆トレース・修正を行い、また、写真図版候補写真を抽出し、仮レイアウトを行った。その挿図・写真図版原図をもとにデジタル編集によるトレースや写真補正等を行い、挿図・写真図版を作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業をへて、整理作業を終了した。

第2節 遺跡の位置と柳沢牧（第1～3図）

今回の調査対象となった近世牧の野馬土手は八街市八街字大畑ほ380.3ほかに位置し、作田川に開拓された支谷の最奥部北側に広がる標高約45mの台地平坦部に立地する。台地南東側の谷津底面までの比高は約12mである。この地点は佐倉七牧うちの柳沢牧の一部にあたり、調査遺跡名は字名から「柳沢牧大木境野馬土手」とした。以下、柳沢牧について説明を行う^⑪。

千葉県内には江戸幕府直轄の牧として小金牧・佐倉牧・嶺岡牧が所在していた。柳沢牧は佐倉牧の中で最南にある小間子牧の北側に接して位置する。もともと小間子牧とは寛文2（1662）年までは一つの牧として機能していた。柳沢牧の範囲は八街市を中心として、佐倉市、山武市、酒々井町にまで及ぶ。『野方七牧村々高帳』寛政11（1799）年では柳沢牧の野付村として山武市7・佐倉市19・富里市3・八街市1の30か村が挙げられている。その中に調査遺跡名の由来となる「大木村」が含まれる。1986年『千葉県生産遺跡分布調査報告書』では柳沢牧の野馬土手32か所（総延長6,655m）の現存が確認され、2006年『県内遺跡詳細分布調査報告書』では絵図や迅速測図、発掘調査成果等を総合的に分析し、牧の範囲を第2図のように東西10.8km、南北9.1kmと推定している。なお、明治維新後、新政府の牧の畠作農村化により、柳沢牧は明治3（1870）年4月に8番目の開拓地として入植が開始され、八街（やちまた）と名付けられた。

柳沢牧で発掘調査が実施された地点は、本調査区を含めて14か所である。調査範囲の制約もあり、土手部のみの調査例が多く、堀とセットで調査成果のある例は少ない。長者堀野馬土手〔第2図⑥〕や屋敷添野馬土手〔④〕では土手の規模に対して掘り込みの浅い溝が確認された。文達野松里野馬土手〔③〕では詳細な土層観察から土手部の構築法や、「宝永火山灰」の堆積状況から構築・補修時期の推定が行われている。近年調査された柳沢野馬土手第2地点〔⑯〕では複数の溝の堆積状況等から土手の改修が想定されている。

柳沢牧の捕込は絵図等から勢多村境・柳沢牧高野牧境土手・墨村境にあったとされる。勢多村境の捕込は東西に長い構造で、享保13（1728）年に作られた新込といわれる。柳沢牧高野牧境の捕込は「高野牧絵図」によると「柳沢牧古込」と記載され、北西から南東に長い三室構造として描かれる。墨村境の捕込は「七牧大絵図」によると南北に長軸をもつ平面長方形を呈する。



第1図 千葉県内の近世牧位置図

4 km

(1 : 50,000)

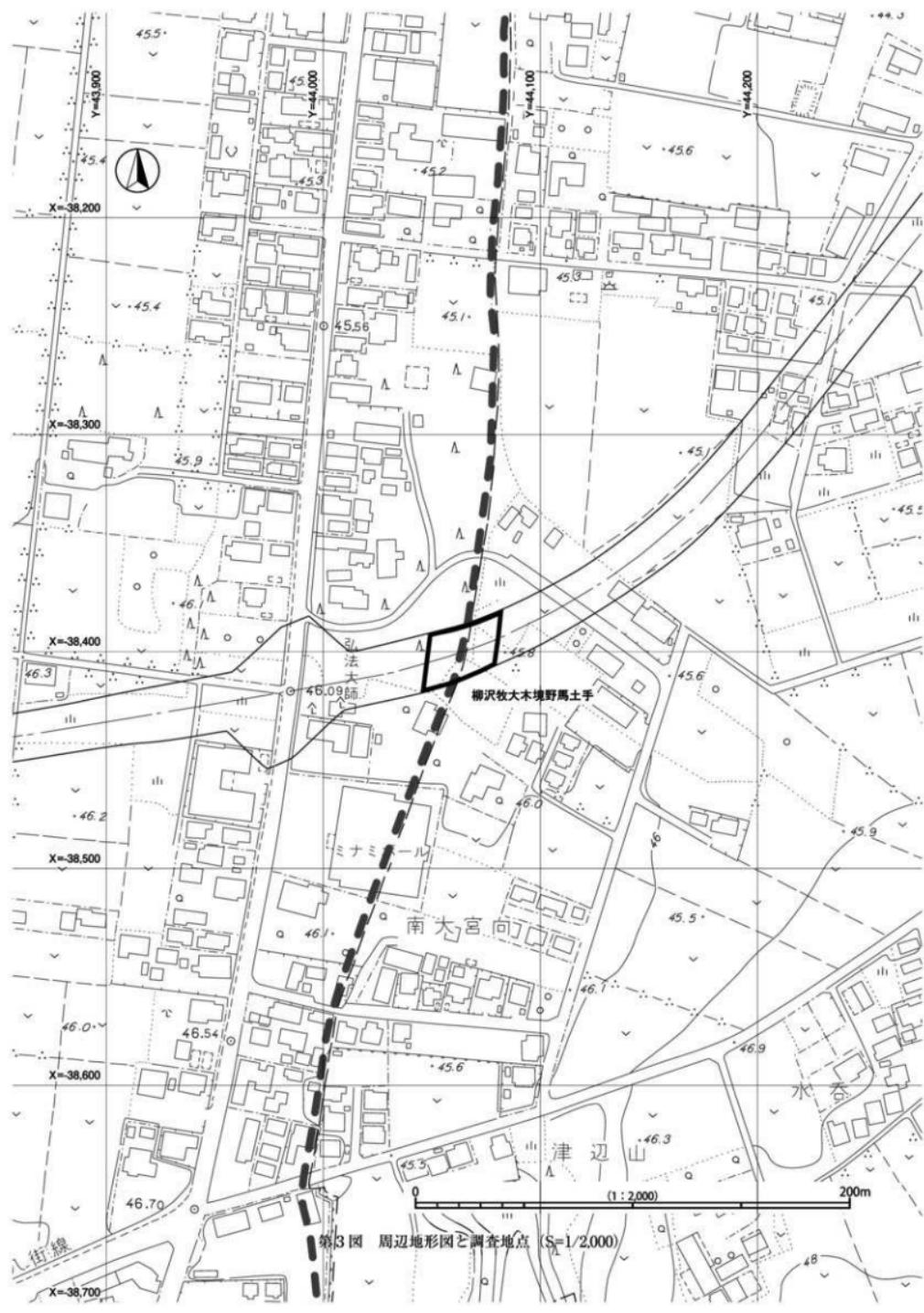
調査地点

- ① 鹿牧村大木塊野馬上手 (今回調査区)
 ② 鹿牧村大木塊野馬上手
 ③ 鹿牧村大木塊野馬上手
 ④ 鹿牧村大木塊野馬上手
 ⑤ 鹿牧村大木塊野馬上手
 ⑥ 鹿牧村大木塊野馬上手
 ⑦ 長者村鶴見沢野馬上手 第2地点
 ⑧ 鹿牧村大木塊野馬上手
 ⑨ 西菜村大木塊野馬上手
 ⑩ 鹿牧村大木塊野馬上手 1
 ⑪ 鹿牧村西光明坊野馬上手
 ⑫ 鹿牧村北神田町野馬上手 第2地点
 ⑬ 鹿牧村鶴見沢野馬上手 第3地点
 ⑭ 鹿牧村鶴見沢野馬上手

捕込



第2図 柳沢牧位置図 (S=1/50,000)



第3図 周辺地形図と調査地点 (S=1/2,000)

第2章 調査の成果

調査区内の野馬土手は当初、竹木の繁茂が著しく、極めて不明瞭であった。竹木の伐採後、八街と日向の地境に沿って幅約5m、高さ約50cmの高まりが南北方向に延びていることが確認できた。北側の調査区外には土手は遺存せず、比較的大きな木がその延長上に樹立している。南側の調査区外に隣接する人家裏にその続きたと考えられる高まりが一部確認できるが、さらにその南側では削平されている。

第4図の地形測量図は10cm毎の等高線で表示した。土手部の東側はやや低く凹み、調査区外に向かい緩やかに高く傾斜していく。一方、西側はほぼ平らで、調査区外にも傾斜は見られない。確認トレンチは調査区の北側と南側に1本ずつ、土手部に直行する東西方向に幅2m、長さ約20mで設定した。その結果、土手部のほかに、それぞれのトレントレーニングで南北方向に延びる土手部に平行する溝を3条検出した。

土手部（第4・5図、図版1～4）

土手の規模は、断面で確認できた第2層（旧表土）の遺存状況と現表土面の高まりから、SD-002とSD-003の間に築かれていたと考えられるため、土手部幅は460cm～550cmである。盛土の遺存高はトレントレーニングの旧表土上面から現表土上面を基準とすると75cmである。盛土自体は全体的にやや傾斜は緩やかで、東側（SD-002側・牧の外側）を中心に崩れている状態といえる。竹根の入り込みがひどく、分層が困難なため、表土層を第1層としてまとめたが、SD-002とSD-003の間の第1層は、本来、盛土主体であったと考えられる。盛土として明確に分層できたのはトレントレーニングの断面側だけである。ロームが含まれている点を基準に人為的な盛土と捉えたが、しまりは全体的に弱い。

SD-001（第4・5図、図版2・4）

溝の規模は、深さ32cm～40cm、幅150cm～190cmである。掘り込みは浅く、底面の断面は皿状である。覆土中に硬化面は確認できなかった。覆土の堆積状況は、人為的ではなく自然堆積と考えられる。トレントレーニング1側では、この溝周辺部分の表土層が厚いが、部分的であり土手の残存ではなく、竹根等による地面の盛り上がりと考えられる。覆土から遺物は出土しなかった。

SD-002（第4・5図、図版3・4）

溝の規模は、深さが旧表土層上面から底面まで112cm～118cm、幅310cm～430cm、底面幅130cm～150cmである。壁面上位は緩やかに立ち上がるが、下位は段を有し底面は平らである。両トレントレーニングの土層堆積状況から第②層下面で掘り直されているように見える。覆土中の硬化面は大きく分けて3面確認できた（第②・④・⑥層）。厚みのあるしっかりとした踏み固められた硬化面である。牧の範囲ではこの溝は、土手（牧本体）の外側にあたり、牧の周りを移動する道路として使われていたことが分かる。なお、第④層中に黒色粒子が微量含まれるが、宝永火山灰かどうかは明確にできなかった。覆土から遺物は出土しなかった。

SD-003（第4・5図、図版2・4）

溝の平面確認できた面がやや低くなってしまったため、平面図上の上端幅は実際より細く表現されているが、溝の規模は断面の堀込み面で計測すると幅100cm～115cm、深さ40cm～46cmである。今回検出した3条の溝の中では最も幅が狭い。底面からの壁の立ち上がりは比較的急である。覆土は地山層のローム層と色調が近似し、しまりはあまりなく、硬化面も確認できなかった。覆土から遺物は出土しなかった。

Y=44,025

Y=44,075



X1

X=-38,390

トレンチ 1

SD-003

SD-002

SD-001

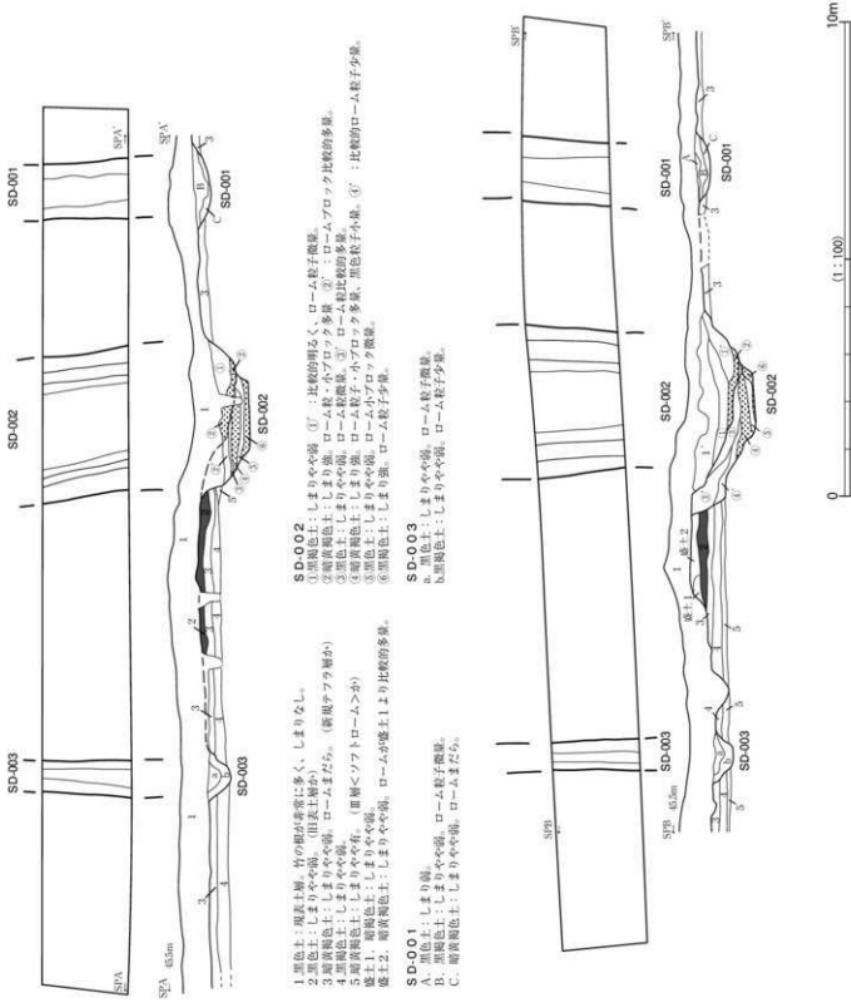
トレンチ 2

X3

X=-38,410

0 (1 : 200) 10m

第4図 調査区平面図 (S=1/200)



第5図 遺構平面図・断面図 (S=1/100)

第3章 総 括

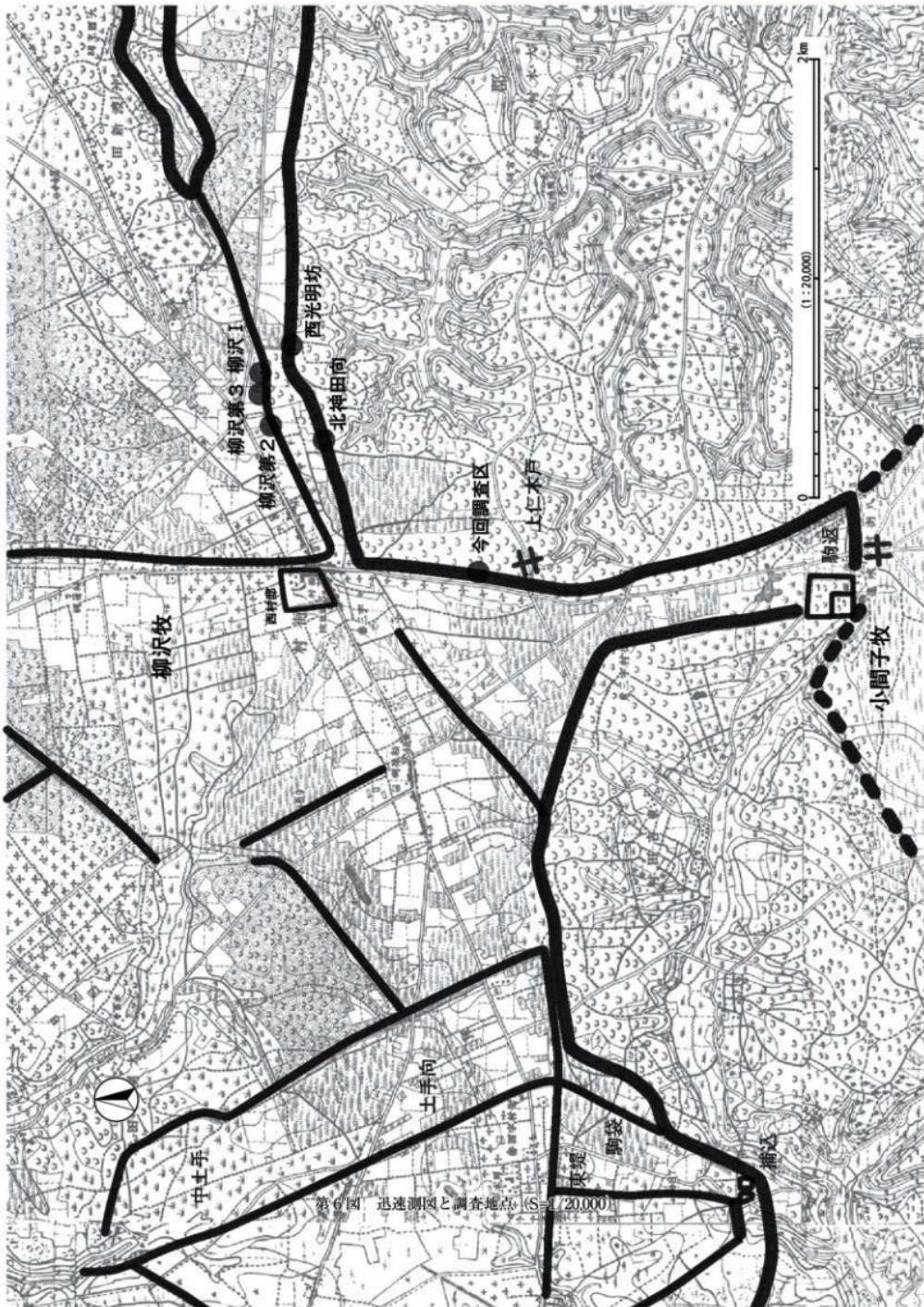
今回の調査対象となった近世牧の野馬土手は、柳沢牧の南東部にある。牧の東端の境土手であるとともに上総と下総の国境にもなっている地点である。調査対象はわずかに高まりを残す野馬土手1条であったが、土手部を確認トレンチで2か所断ち割ったところ、南北方向に並行して延びる溝を3条検出した。遺物はトレンチ内の遺構覆土を完掘したが出土しなかった。

調査した土手部は現状では東側に崩れて高さがないが、外側の堀は110cm以上の深さを有し、境土手であることから、幅約5mに相応する規模であったと考えられる。盛土を確認できた部分は少なかったが、ロームの混入が少ない点は柳沢牧の既調査成果と共通した特徴である。土手から大きく東に離れるSD-001は、主軸が他の遺構と同様であるため、2重土手の溝または牧が東側に広かった時期の古い溝である可能性が考えられる。土手の東側に接するSD-002は、しっかりととした掘込みで、硬化面を有するため、堀と道という2つの機能も兼ねていた。壁面下位が段になっていたが、当初の形状ではなく、数回の掘り直しの結果の可能性がある。SD-003は位置からみて土手の内側を区切る溝として捉えられる。

明治前期の迅速測図に野馬土手調査地点と絵図等から判明している捕込や木戸、土手の位置を表記したのが第6図である。調査区周辺は駒返や駒袋、上仁木戸など当時の地名を残す地域であり、部分的とはいえ、土手と複数の溝がセットで調査できたことは、絵図や文書には表れてこない牧の景観や機能等を検討していく上で、貴重な成果といえる。また、最終的に遺存している土手部から離れた位置で浅い溝が検出された事や溝の掘り直しが行われた事等、牧の規模の拡大や縮小の可能性を考慮しながら、確認トレンチの設定や調査対象範囲の決定についても注意が必要であると思われる。

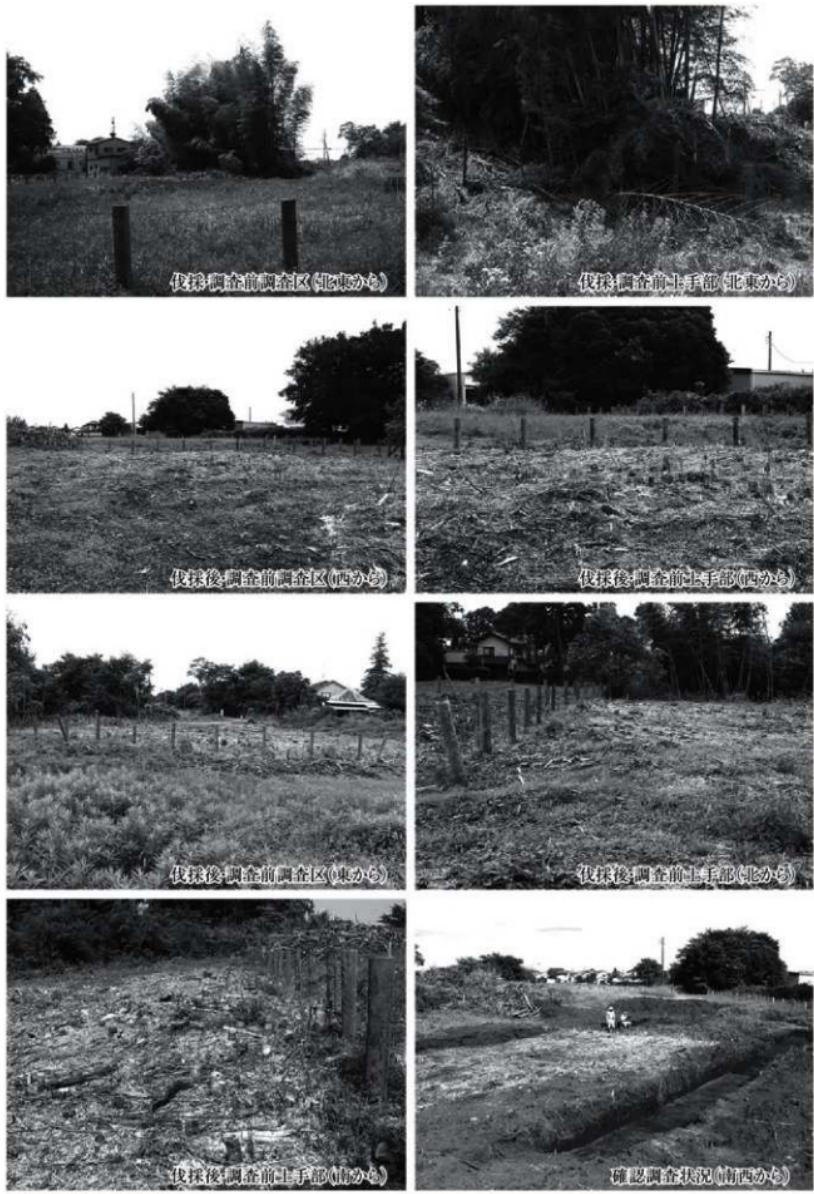
注) 柳沢牧・周辺遺跡の内容については下記文献を参照した。第2図は下記^①文献の第36図を元に作成し、柳沢牧内の調査地点Noと下記文献Noは対応している。

- ①本書
- ②(財)印旛都市文化財センター 1986『大関大曲遺跡・柳沢牧・御成街道発掘調査報告書』第3集
- ③(財)印旛都市文化財センター 1992『財団法人印旛都市文化財センター年報8－平成3年度－』
- ④(財)印旛都市文化財センター 2002『柳沢牧文達野松里野馬土手』第195集
- ⑤富里市教育委員会 2013『平成23年度富里市内遺跡発掘調査報告書』
- ⑥⑩八街市教育委員会 1993『平成3年度八街市市内遺跡発掘調査概報』
- ⑦八街市教育委員会 1996『長者堀柳沢牧野馬土手(第2地点)発掘調査報告書』第2集
- ⑧(財)印旛都市文化財センター 1991『曳拌塚1号墳・宮前古墳・南常盤野馬土手発掘調査報告書』第46集
- ⑨八街町 1991『小間子牧野馬土手 西榮柳沢牧野馬土手発掘調査報告書』
- ⑪⑫(財)印旛都市文化財センター 2001『柳沢牧西光明坊野馬土手・柳沢牧北神田向野馬土手』第179集
- ⑬⑭平成18年度八街市教育委員会調査
- ⑮平成24年度(公財)千葉県教育振興財團文化財センター調査
- ⑯千葉県教育委員会 1986『牧』『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』
- ⑰千葉県教育委員会 2006『柳沢牧』『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』



第6図 応急測図と調査地点 ($S=1/20,000$)

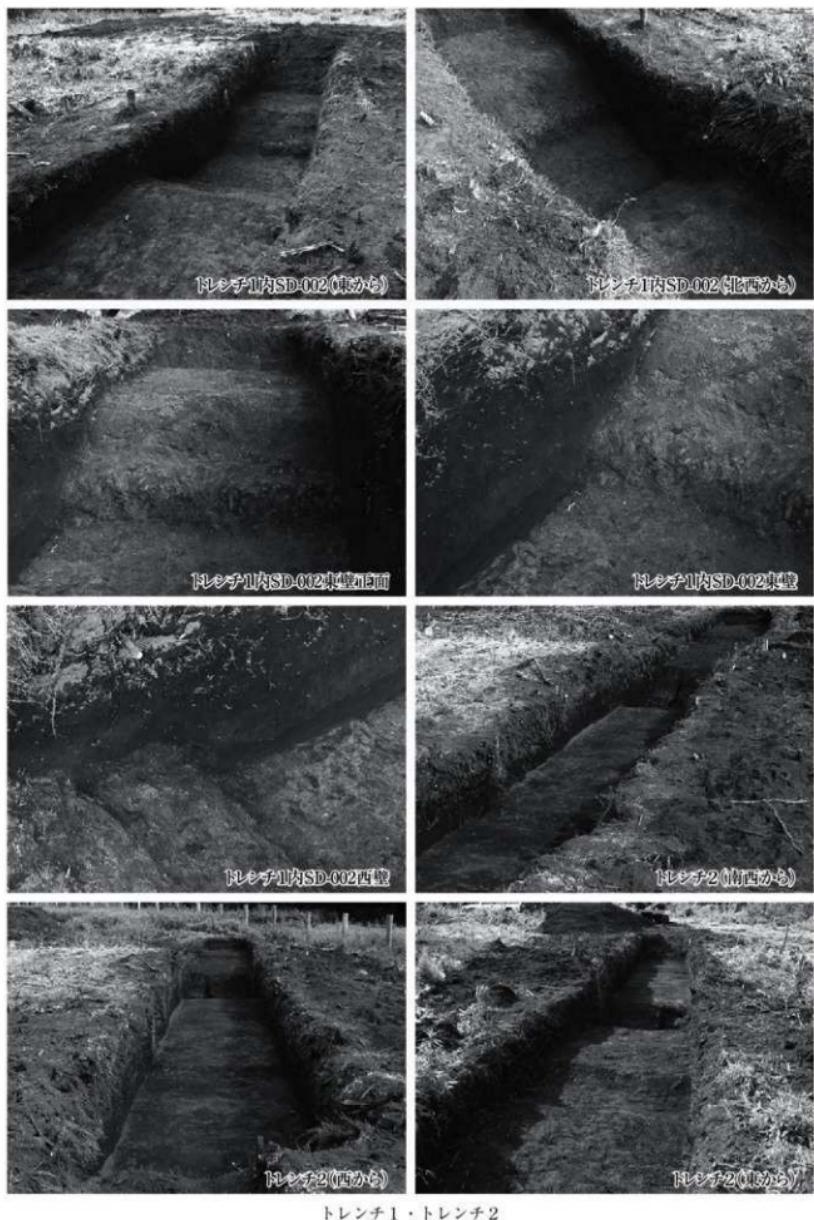
写 真 図 版



図版 2



トレンチ 1



図版 4



トレンチ 2・調査後状況

報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第2集

八街市柳沢牧大木境野馬土手

— 主要地方道成東酒々井線道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成26年3月25日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1番1号

印 刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397
